

(剖檢記事) 左慢性化膿性股關節炎

ノ充血アリ(肝)ハ別ニ異常ナシ(右腎)ハ長徑十仙迷チ有シ左ハ十二仙迷ニシテ上端ハ脾臓ト癒着シ後面ハ實質侵蝕セラル(横膈膜)ハ左側椎骨起首部ニ於テ一孔ヲ有シ上ハ肺ノ膿腫ニ連リ下ハ脊椎ノ左側ニ沿テ脾腎ノ後ヲ降り左膈膜筋膜下ニ入り下行スルニ從テ小骨孟ニ入り大坐骨孔ヨリ彼ノ大腿後側ノ癰瘍部ニ至ル其他腹腔内諸臓器ハ異常ナシ

剖檢記事

◎左慢性化膿性股關節炎

(既往症) 石川縣河北郡太田村町田某(四十年)生來健康ニノ骨テ藥石ノ臭味ヲ知ラスト然ルニ今ヲ去ハコ九年(即テ明治十五年)患者三十一歳ノ疔疳痛ニ罹リ二三ヶ月ノ後ニ至リ咳嗽、咯痰甚ダシク時トシテ血痰ヲ混ヘ胸内苦悶、疼痛ヲ發シ爲メニ暮ヲ守ルコトケ年余

ニシテ漸ク輕快シ翌年ノ五月頃ニ至リ全ク治セリト雖モ罹病前ニ比スレハ稍々虛弱トナレリ然トモ依然農業ヲ營ミ骨テ怠リシコナシ

昨年五月中旬頃脱走入ヲ探索スル爲メ東奔西走セリ然ルニ一夜左ノ股關節部ニ鈍痛ヲ覺エタリシモ之レヲ顧ミスノ奔走シ三晝夜ニシテ安息スルコト得タリト雖モ疲勞ト共ニ疼痛増加シ勞動ヲ癡スルコト二十餘日ナリシカ後漸ク輕快シテ復タ患者ヲ遣サ、リシ同年七月ニ至リ再ヒ前ノ疼痛ヲ發シ爲メ跛行狀トナリ延テ八月ニ至リ僅カニ寒胃ノ氣味ニ伴ヒ同股關節ヨリ大腿ノ上部ニ蔓延性ノ腫起ヲ來シ皮膚ニ變色ナク少シク熱灼シ時々膝關節ニ微痛ニ波及シ歩行障害増加シ杖ニ依リテ漸ク跛得シ得ルノミ爾來腫起、運動障害益々増加スルヲ以テ十月ニ至リ某醫ニ治ヲ乞ヒ穿刺シテ膿ヲ泄スト三合余ヲリ後曰々排膿シ多キハ二三合ニ達ヒシコアリト從

テ腫起減退スルモ穿刺后ハ頓ニ衰弱ヲ加ヘ葦ヲ離ル、  
 1克ハサルノミナラス仰臥ノ位置ヲ取リ股關節ハ屈曲  
 外轉シ内轉伸展スルヲ能ハス且ツ時々一種刺メカ如キ  
 疼痛ヲ發シ之レカ爲メニ安眠ヲ破ルヲ屢ナリ同年十二  
 月頃ニ至リ排膿其量ヲ減シ疼痛モ稍輕快シ本年二月ニ  
 至リ精神爽快トナリ食機亢進シテ大ニ快復シタリト雖  
 モ股關節及膝關節ノ屈曲外轉ハ故ノ如シ二月ニ至リ  
 嘗テ穿刺セシ瘻管ノ下方ニ於テ自開ニ由テ更ニ一箇  
 ノ瘻管ヲ作り爾後之レヨリ排膿シ前穿刺孔ハ自ラ閉鎖  
 セリ、其後ハ別ニ記載スヘキ變化ナク荏苒本月七日ニ  
 至リ本院ニ投スト云フ

(現症) 營養体格共ニ不良ノ一男子ニシテ全身著シク  
 羸瘦シ仰臥ノ位置ヲ取ル脈膊百二十至、体温三十七度  
 八分

胸部ヲ檢スルニ鎖骨上下窩ハ甚シク陷沒シ呼吸運動微

弱ニシ鎖骨肋骨凸陷ス右胸ハ打診及聽診上ニ變化ヲ認  
 メスト雖モ左胸ハ一般ニ打診音短カク聽診上呼吸音幽  
 微ニシ呼吸氣ニ際シ處々ニ且性ノ音ヲ帶フ

下。肢ヲ檢スルニ左側ノ股關節ハ屈曲、外轉、位置  
 ナ探リ他動ヲ試ムルモ疼痛ノ爲メニナス能ハス大轉子  
 ノ上部ハ少シク腫起熱灼アリ其後下方ニハ嘗テ穿刺セ  
 シ瘻管アリ其前方ニ一ノ弛緩セル瘻口アリ帶青灰白色  
 ノ膿ヲ泄ス試ミニ穿刺口ニ消息子ヲ挿入セントスルモ  
 己ニ閉鎖シ自開セシ者ハ深ク前上方ニ向ヒ十仙迷余挿  
 入スルモ未タ關節内ニ達セス而シテ其觸ルモノハ糜粥  
 様軟泥ノ感ヲ與ヘ更ニ骨質ニ觸レス尙ホ深部ヲ探ラン  
 トスルモ知覺甚ダ過敏ニシテ患者其挿入ヲ許サス大轉  
 子及ポーパル氏靱帶ノ下方ヲ壓スルニ疼痛ヲ訴ヘ殊ニ  
 大轉子ヲ壓スルニハ甚ダシ試ミニ脊椎及薦腸關節等ヲ  
 壓迫スルモ疼痛ナシ只薦骨ノ下部ニ葦瘡半治ノ痕跡アリ

## (剖檢記事) 左慢性化膿性股關節炎

リ」膝關節ハ殆ント四十五度ニ屈曲シ之レヲ伸展セン  
トフルトキハ股關節部ニ疼痛ヲ發スルノミナラス二頭  
股筋、半膜樣筋等ノ緊張ニ由テ制セラレ伸展スル能ハ  
ス

右股關節ハ殆ント異常ナシト雖モ右膝關節ハ同シク屈  
曲シ自動ニ由テ直角、他動ニ由テ百二十度迄ニ伸展ス  
ルヲ得ルノミ

其他二便ハ異常ナシト雖モ食欲漸々減少シ衰弱其度ヲ  
増シ遂ニ六月五日午前六時死亡ス

(剖檢) 死後凡ソ三十三時ヲ經過シ全身非常ニ羸瘦ス  
皮膚ハ蒼白色ニメ筋強直尙存ス、腹部ハ陷沒シテ腹中  
一物ヲモ存スルヲナキカ如ク直チ脊柱ニ達ス、薦骨部  
ニハ手掌大ノ褥瘡アリテ惡膿ヲ附着シ又左側大轉子ノ  
部ニ大小五個ノ切開創及痛管アリ其他別ニ記スヘキ  
ナシ(大腿ノ中央ハ十六仙迷ノ太チ有ス)

(腹腔) ナ開檢スルニ大網膜ハ脂肪ニ乏シク其右下緣  
ハ少シク腹壁ニ癒着ス腸管ニハ異常ナシ胃ハ大ニ縮小  
シ脾ハ稍小ニシテ實質變化ヲ見ス左腎ハ十三仙迷ノ長サ  
ヲ有シ右腎ハ少シク小ニシテ鬱血ス

(胸部) 左右ノ肋膜ハ強度ノ癒着ヲ有シ肺質ノ分離ス  
ルヲ能ハス肺ハ左右共ニ結核ヲ以テ浸潤セラル殊ニ左  
肺ニ於テ甚ダシトス(然レモ空洞ヲ認メス)

心臟ハ肥大シ大動脈辨ハ癰痕萎縮シ不全閉鎖ナリ左室  
ノ内膜ニモ又癰痕部アリ

(左股關節、薦骨部) 今薦腸關節ノ下部ヨリ大腿ノ後  
側ニ沿テ直線ニ皮膚及筋肉ヲ切開スルニ筋ハ既ニ不潔  
暗色ヲ呈シ膿汁ヲ以テ浸潤セラル、股關節ノ囊韌帶及  
副韌帶ハ悉ク侵蝕セラレ容易ニ脱臼シ得ヘシ、大腿骨  
頭及頸部ハ骨疽狀ヲ呈シ暗色ニシテ緻密質ヲ存セス脾  
白モ又同様ノ觀ヲ呈ス

薦骨ハ華瘡ノ直下部ニ於テ骨疽ニ陥リ暗黑色呈シ廣ク膿ヲ以テ皮下ニ浸潤ス（按スルニ此部ハ原發地ニシテ膿ノ股關節内ニ破壊セシ者ナラン？）

（谷中正勝記）

## 雜 錄

### ◎陸軍兵食検査（六月二十三日官報）

曩ニ陸軍々醫學校ニ於テ検査セル兵食検査醫員ノ試験成績ニ就キテ同校長ヨリ陸軍省醫局長ニ進達シタル略報左ノ如シ

兵食検査ノ儀曩ニ委員ヲ置カレ其實験ハ軍醫學校ニ於テ施行スヘキ旨達セラレ爾來委員三名ノ非常ナル勉勵ト步兵第一第二兩聯隊長及東京衛戍病院長等ノ協賛トニ由リテ今ヤ其局ヲ結フニ至レリ抑モ該試験ノ舉タル歐米ニ於テモ古來如此多數精密ノ調査アリタルヲ聞カ

ス管ニ養兵ニ附キテ而已ナラス衛生學上頗ル裨益アル舉ト云フ可シ而シテ其精密ナル報告ハ頗ル浩瀚ニシテ數月ノ後ニアラサレハ淨寫進呈スルヲ得サルカ故ニ先ツ其要ヲ摘ミ以テ別紙ノ報告ヲ呈ス而シテ本校教官一等軍醫谷口謙ハ此兵食試験ト併行シテ尿中硫黃ノ量ヲ検査シ該兵食試験ノ成績ニ同一ノ成績ヲ得タル故ニ本報告ニ附シテ以テ呈ス此兵食試験ニ於ケル浩瀚ノ書類ト試験ニ供用シタル材料トハ永ク本校ニ保存シ以テ後証ニ供セントス謹テ白ス

明治廿三年四月一日 陸軍々醫學校長石黒忠惠

陸軍省醫務局長橋本綱常殿

### 兵食検査成績略表

兵食検査ハ今ヤ一タヒ其局ヲ結ヒシカ成績繁多ニシテ未タ悉ク之ヲ淨寫スルニ及ハス然レモ權ニ其既ニ得タル所ニ就キテ略々我米食ト我所謂麥食ト我所謂洋食ト

ノ利害得失ヲ言ハントス

食ノ人身ニ致スヘキ力ハ之ヲ温量ニ算スルヲ最便ト  
ナス乃チ常ニ上ニ舉ケタル三食中ノ一種ヲ食ヘル兵卒  
各六人ニ就キテ八日間ノ實驗ヲ行ヒ其消化シタル食中  
平均一日ノ温量ヲ求メタルニ米食主ニ居リ麥食之ニ次  
キ洋食又次ク其數目左表ノ如シ

	米食 カロリー	麥食 カロリー	洋食 カロリー
第一人	二四四九、八一	二一八〇、三五	二二一七、三二
第二人	二六七五、八一	二二七八、四一	二三〇七、一七
第三人	二七六六、八四	二二四四、七二	二二三五、五一
第四人	二六五三、一一	二一九二、七八	二一八六、二〇
第五人	二六七六、五七	二二二五、四二	二二一八、六六
第六人	二二五七、六九	二二四三、三二	二一九二、三六
平均	二五七九、九七	二二二七、五〇	二二〇九、五四

又從來食ヲ論スル者ハ多クノ窒素過不及ヲ云ヘルカ故

ニ上ニ舉ケタル三食ニ就キテ身ニ入リシ窒素ト身ヨリ  
出テシ窒素トヲ精査シ其平均一日過不及ヲ求メタルニ  
米食主ニ居リ麥食之ニ次キ洋食又之ニ次ク其數目左表  
ノ如シ表中(十)標ハ過ヲ示(一)標ハ不及ヲ示ス

	米食 グラム	麥食 グラム	洋食 グラム
第一人	十 二、八六	一 〇、四六	一 三、一七
第二人	十 三、四七	一 一、四六	一 二、二四
第三人	十 一、六〇	一 〇、二七	一 二、四九
第四人	十 二、〇九	一 一、八七	一 二、八五
第五人	十 二、〇二	一 三、二九	一 四、二六
第六人	十 一、六八	一 一、二九	一 二、二六
平均	十 二、二九	一 一、四三	一 二、八八

附言、以上ノ試驗ニ供セシ兵卒中米食者ト所謂麥食  
者トハ之ヲ歩兵第一聯隊ニ借り所謂洋食者ハ之ヲ歩  
兵第三聯隊ニ借りシモノナリ

米食者ノ検査ハ明治二十二年八月十二日ヨリ同十九日ニ至ル間所謂麥食者ノ検査ハ同年十月十五日ヨリ同月二十二日ニ至ル間所謂洋食者ノ検査ハ同年十二月十三日ヨリ同月二十日ニ至ル間ニ於テセシモノナリ

明治二十三年三月三十日

兵食検査委員

陸軍一等軍醫 森 林 太 郎

陸軍一等藥劑官 大 井 玄 洞

陸軍三等藥劑官 飯 島 信 吉

尿検査ノ成績

陸軍一等軍醫 谷 口 謙

此検査ノ主點ハ食物ト体中酸化作用トノ間ニ如何ナル關係ヲ存スルヤヲ知ルコアリ此目的ノタメニ米食ヲ食ヒタル者及洋食ヲ食ヒタル者ノ尿中ノ硫酸(無機及有

機硫酸)及硫黃(含硫黃有機化合物中ノ硫黃)ヲ定量シタリ其八日間ノ平均甲ニ在リテハ硫黃一ニ付硫酸六、五六三、乙ニ在リテハ硫黃一ニ付硫酸六、四五〇、丙ニ在リテハ硫黃一ニ付硫酸五、六五一ナリ其差次ノ如シ

甲=6,563—乙=6,450=0,113

甲=6,563—丙=5,651=0,921

乙=6,450—丙=5,651=0,799

是ニ由リテ之ヲ觀ンハ甲ノ硫酸乙ノ硫酸ヨリ多キヲ硫黃一ニ付〇、一二三、丙ノ硫酸ヨリ多キヲ〇、九一二、又乙ノ硫酸丙ノ硫酸ヨリ多キヲ硫黃一ニ付〇、七九九ナリ

尿中ニ存スル硫酸及硫黃ハ蛋白質ヨリ來ル者ナリ而シテ体中酸化作用盛ナルキハ尿中硫酸ノ量硫黃ノ量ニ比シテ増ス故ニ體中酸化作用ノ盛衰ヲ探知スルニハ硫酸ト硫黃トヲ定量シテ其量ヲ相比較スルヨリ良キハナシ

余嘗テ亞爾加里ノ体中酸化作用ニ及ホス影響ヲ檢定スルタメ犬ニ醋酸那篤倫ヲ與ヘ其尿中ノ硫酸及硫酸ヲ検査シテ満足ナル成績ヲ得タリ (Vichow's Archiv 117. Bd. 1889 アリ)

此回ノ試験ノ成績モ亦余ニ満足ヲ與ヘタリ何トナレハ其成績ハ兵検査試験委員ノ得タル成績ニ符合スレハナリ余ノ得タル成績ヲ約言スレハ米食シタル者ハ麥飯ヲ食ヒタル者及洋食ヲ食ヒタル者ヨリ又乙ハ丙ヨリ体中酸化作用盛ナリ

此ニ供用シタル尿ハ兵食試験委員試験ニ用ヒタルモノ殘餘ナリ

### 兵食検査成績略解説

兵食検査ノ成績ハ固ヨリ學問上ノ報告ノ體裁ヲ完備スヘキモノナレハ検査ノ目的、材料、方法ナドヨリ詳ニ説起スヘキコト言テ俟タス今此略報ハ眞ノ報告ヲ公ニス

ヘキ期ニ先ヲテ上リシモノナリ故ニ其體裁モ整ハサル所多カルヘケレト學問上ノ報告ニモ豫報トイフモノアリテ先ツ成績ノ要旨ヲ摘ミテ世ニ出ス習ナレハコレヲモ彼豫報ノ類ト見做スコトヲ得ヘシ

成績ハ一意貫通、完璧ヲナスヘキモノナルニ略報ハ僅ニ一部分ノ算定ヨリ得セモノナレハ後ニ出サソモノト少異同ナキヲ保シ難シ故ニ其既ニ得タルモノニ就キテ諸食ノ利害得失ヲ言ハントハイヒシナリ

サテ検査セシ兵食ニハ我國人常食ノ米飯ナルモアリ米ニ麥ヲ交ヘタルモアリ麵包ト肉トヲ多ク供シタルモアリキ常食ナルヲ米食トイヒ麥ヲ交ヘタルヲ麥食ト言ヒ麵包ト肉トヲ多ク供シタルヲ洋食ト云フ麥食ヲ指シテ所謂麥食ト云ヒシハ別ニ麥ノミヲ炊キシ者ヲ食ハセシ試験モアデコ、ニ麥食ト云ヘルト殊ナルヲ明ニセントテナリ又所謂洋食ト云ヒシハ彼麵包ト肉トヲ多ク給

スル兵食ニハ眞ノ洋食ト同シカラス日コト米サヘ多ク  
マシリタレハナリ

凡ソ食ノヨシアシヲ定メントスルニハ今モ猶ホ總テノ  
學者ノ承認シタル尺度ヤウノモノアルニアラス我邦ニ  
テハ一時、食中ノ窒素ト炭素トノ關係數ヲ舉ケテ窒素  
ノ一ニ對スル炭素ノ數愈々少ケレハ食愈善シトイヒシ  
人ハアレト今明ニ應ニ然ルヘキ道埋アリテシカイヒシ  
ニアラス歐州ニテ試ミタル一二ノ食ヲ基トシテカク説  
キシノミナレハ定論トハナシ難タク又フオイトトイフ  
バワリアノ博士カ定メシ窒素量ナトチ動カスヘカラス  
モノノヤウニイヘルモオナシ

此檢査ニテハ兵食中ノ物ノ燃ユヘキ限コレヲ燃シテ得  
ヘキ溫料ヲ定メテ比ヘ試ミシナリ、ソハ近頃此法ノ正  
シサヲ説ク人モ多ク其人々ノ説キタル所モ此檢査ノ成  
績ニタイユ々々精確ト見ユルヤウニナリタレハナリ溫

量ノ一位ハ一瓦ノ水ヲチエルジウスノ檢溫器ノ一度ノ  
ボルマテ燠ムル力ナリ

食ノ溫量ヲ定ムルニ腹ニ入りシモノニ就キテ洩サス計  
ルハ容易ナレト腹ニ入りモノヨリ消化セシテ身ヲ離  
レシモノヲ引去リテ得タル食ノ溫量ヲ算スルハ難シ此  
檢査ニハ一人ノ身ノ出納ヲ化學上ニ精檢シテ眞ニ消化  
シタル食ノ溫量ヲ舉ケタレハ略報ノ文中ニモ其消化シ  
タル食中ノ溫量ト特ニ記シタルナリ

人身ノ窒素出納ヲ檢シテ身ヲ山テタル窒素ノ多キハ身  
ニ貯ヘシ窒素ヲ失ヒシ徵ナリ身ニ入りタル窒素ノ多キ  
ハ大抵新ニ窒素ヲ身ニ貯ヘシ徵ナリ略級ノ末ノ表ニ  
(十)ノ標アルハ新ニ窒素ヲ身ニ貯ヘシモノナレハ給食  
ノ點ヨリ見テ過キタルナリ(一)ノ標アルハ兼テヨリ身  
ニ貯ヘシ窒素ヲ失ヒシモノナレハ給食ノ點ヨリ見テ及  
ハサルナリコノ不及アレト兵士ノ健康著シク害セラレ



(抄録) 軟性下疳及ヒ横痃ノ原因 婦人科ニ於ケルアポストリ氏法

三百五十八

サル理由ニ就キテハ別ニ考アレト此食ヲ得ル兵卒モ常ニ酒保ノ嚮ケルモノヲ食ヘルナト補闕ノ一法ナルヘシ猶ホ兵卒體重ノ増減ニ據リタル説ナトアレト眞ノ報告ニ讓リテ此ニハ省キツ

明治二十三年三月三十日

兵食検査委員

陸軍一等軍醫 森 林 太 郎

抄 録

◎軟性下疳及ヒ横痃ノ原因 (A. Ducrey, Mo)

natsl. f. Prakt. Dermat. 1889 IX. No. 9.)

ヅクレイ氏ハ培養法及ヒ接種試験ニ由リテ軟性下疳ノ原因タル黴菌ヲ証明セリ該菌ハ短小ニシテ一端鈍圓形ヲナシ四個乃至八個ノ群團ヲナシテ細胞間殊ニ膿球ノ成形成原中ニ存ス而シテ本菌ハ通常ノ榮養基中ニハ發育

スルコトナク熱病患者殊ニ三十九度乃至四十度ニ於テ持續シタル熱ニ由リテ破壊セラル又氏ハ横痃ニ就テ説ヲ作シテ曰ク横痃ハ下疳ニ微小体ノ産物ニ由リテ發起セラレタル組織反應ノ結果ナリ云々ト

◎婦人科ニ於ケルアポストリ氏法 (Saton)

Stn. Chl. f. Gyn. 1880 No. 18)

サトンスキー氏ハ三十回ノ實驗ニ基キ左ノ事項ヲ確定セリ

- (1) 喇叭管水腫及ヒ血腫ニ於テハ百五十乃至百八十元ノ電流ニ由リテ良成績ヲ得タリ喇叭管化膿ニ於テハ更ニ輕快ヲ得カリキ
- (2) 慢性卵巢炎ニ於テハ百六十乃至二百二十元ノ電流ニ由リ卵巢縮小シ疼痛減殺セリ
- (3) 慢性子宮炎ニ於テハ按摩法ヨリ電氣(二百八十元ニ至ル)ヲ良トス即チ子宮縮小シ疼痛減退セリ

(4) 無月經症ニハ成積ナシ

(5) 纖維腫ニハ手術前毎常試テ可ナリ

(6) 萎縮性子宮近傍炎(一回)ニ於テハ之ニ由リテ輕快セリ

### ◎流行性感胃合併症ノ「ファル」(Feege.

Allgem. med. Central-Ztg. 1890, No. 24.)

フエーゲ氏ハ「インフルエンツァ」ノ「ファル」ニ於テ發病一二日ノ頃顔面神經麻痺ノ現ハレタルヲ實驗セリ而シテ該患者ハ敢テ中耳變化ヲ呈セス特別ノ治療ヲ施カ、リシモ其經過後麻痺ハ自ラ消退セリト云フ

### ◎安質比林發疹ノ「ファル」(Aus der Klinik

d. Prof. Doutrelepont in Bonn. Chl. f. Klin. Med. 1889.

No. 49.)

一壯年ノ男子二、〇ノ安質比林ヲ内服シタルノ後高度ノ熱發嗽下困難流涎顔面手足ノ「チアノーゼ」ヲ來タシ

口腔粘膜ニ無數ノ發疹ヲ呈シ項部ト兩手及前膊ニ暗青赤色ノ斑點ヲ現ハシ下肢及兩手背ニ於テ「マルク」質大ノ水泡ヲ發生シ陰囊ハ赤色光澤ヲ呈シ其面ニハ痂皮及膿汁ヲ以テ被ハレ而シテ五日ノ後熱下降シ上記ノ變化消退セリ然ルニ全治ノ後再ヒ同量ノ安質比林ヲ用ヒシニ暫時ニシテ強キ寒戰ト高キ熱發ト達セリトテ前驅シテ復タ上記ノ如キ發疹ヲ現ハセリ

### ◎ワイル氏病報告二件 (Chl. f. med. Wissensc

h. 1890, No. 10.)

(第一) 黃胆及腸胃炎ヲ合併シタル傳染性熱病ニシテロ

ーザンバハ、Prof. Dr. Rosenbach氏ガフレンスラウ府 Aller

heiligen Hospitalニ於テ實驗シスナルO. Sirl氏カ報告シ

タル者ナリ即チ三十五歳ノ浚溝者誤テ糞池中ニ陥リ多

量ノ汚物ヲ嚥下セシカ直チニ寒戰一時間ニ嘔吐及ヒ下

痢ヲ發シ体温ハ初二日間稍高度トナリ次テ散換性ニ下

(抄録) 流行性感胃合併症ノ「ファル」 安質比林發疹ノ「ファル」 ワイル氏病報告二件 三百五十九

降シ久キヲ經テ再ヒ稍上昇セシモ暫時ニシテ又下降セリ腹部ハ膨滿シ肝臟ハ増大シ壓チ加フルニ過敏ナリキ次テ輕度ノ黃胆ヲ發シ脾臟ハ著ク腫脹シ尿中ニハ蛋白ヲ含ミ且ツ圓柱ト赤白血球ヲ混有セリ又腦症ニハ頭痛眩暈譫妄等ヲ現ハセリ

上記ノ集合徵候ハ彼ノ熱性黃胆脾腫腎炎等ヲ以テ經過スル所ノワイル氏病 *Weilsche Krankheit* 一致セリ而シテ其原因トシテ考フヘキ者ハ汚物ノ嚥下ナリキ蓋シ其速ニ寒戰ヲ發起シタルハ汚物中ノ么微有機體ニ基因セシニアラスシテ恐クハ汚物中ノ「プトマイン」及ヒ毒物ヲ直接ニ攝取セシニ由リテ發セシモノナラン

(第二)腎炎及ヒ脾腫ヲ兼テタル熱性黃胆ニシテクラメル H. Cramer 氏カ實驗シタル者ナリ即チ患者ハ四才ノ小女ニシテ「サントニン」ノ中毒ニ由リテ之ヲ發セリ此實驗ニ基キ C 氏ハ說ヲ作シテ曰クワイル氏カ傳染病

トシテ定メタル集合徵候ハ病原學上單一ナル者ニアラス即チ箇ニ腸ニ作用スル傳染ニ基因スルモノナラス又胃腸ニ於ケル直接ノ毒物作用ニ由リテ發スル者ナリト

以上五項 山崎秋津磨抄録

### ◎慢性膀胱加答兒沃度ホルム療法 (Cent

alb. f. Chirurg. No. 23:1890)

Ludwig Frey ハ慢性膀胱加答兒ノ療法トシ初メ膀胱ヲ微溫湯ヲ以テ洗滌シ其液ノ混濁セサルヲ度トシ左ノ處方ノ混合劑即チ

沃度ホルム 五〇、〇    クリセリン 四〇、〇

蒸餾水 一〇、〇    トラガントコム 〇、二五

右混合シテ用ユルニ臨ミ震盪スヘシ

右ノ混合劑ヲ日々三箇膀胱内ニ注入シ三乃至四回ニシテ其成績ヲ得タリト然レモ其液藥ノ注入量ニ至リテハ

豫メ之レテ明言スルヲ能ハス而シテ之ノ膀胱加答兒ノ沃度ホルム療法ハ敢テ今日ニ始マリタルニアラスシテ既ニ己ニV.Nussbaum氏ハ同目的ニ此ノ藥液ヲ用ユヘキヲ説ケリ然レモ只溶液ノ希薄ナルノミナリ

(沃度ホルム一、〇クリセリン五、〇蒸餾水二〇〇、〇)

# ◎「シフテリ」ノ療法 (Centralb. f. Chirurg. No.

19,1890)

A. E. Hoadleg シフテリ一ハ常ニ局部殊ニ咽喉ニ發スル疾病ニシテ其原因タルモノハ良性或ハ惡性等種々ノ微細有機体ナリ此有機体ハ粘膜上就中扁桃腺表面ノ凹陷部ニ發育シテ一種ノ毒素即プトマイチ (Ptomaine) ナリ成シ肺又腸ニ達シ吸收セラレテ遂ニ血液ヲ毒ス又化膿性ノモノアレモ有機体中化膿梅毒ノ存在スルキニ止マルミ此有様ハ著述者ノ所謂シフテリ一ノ定點ニシテH氏ハ之レヲ撲滅スルノ目的ニ沒藥丁幾殊ニ次ノ處方

ニ從テ調劑セリ

クロール加里 五、〇 沒 幾 一五、〇

石炭酸 五滴 蜂密 二〇、〇

蒸餾水 適宜全量 一五〇、〇トシ毎半時十五滴

ヲ取り用ユ又吸入セシムルモ可ナリ之ノ混合劑ハ初メハ味苦ク感スト雖モ漸々苦味ノ感消失シテ遂ニハ患者好テ之レヲ取ルニ至ル而シテ之ノ沒藥丁幾ハ防腐力殊ニ強クシテ分泌物中プトマイチノ構成ヲ直ニ防遏シ得ヘシ然レモクロール加里ヲ用ヘテ劇甚ノ疼痛アルトハ之レニ換フルニ石灰水ヲ以テスヘシ之レ直接ニ義膜ヲ溶解スルノ力アレハナリ右混合劑ノ適應法ハ

(第一)咽喉頭シフテリ一ノ輕症ニシテ其有様ヲ伺ヘ知り得ヘキモノニ對シテハ日夜毎半時十五滴ヲ與ヘ可成的長ク口腔及咽喉腔内ニ保タシメ然ル后ニ嚥下セシムヘシ又含嗽シテ后吐出セシムルハ每一乃至二時一茶ヒヲ

## (抄 録) 脊椎炎ニ就テ

與フヘシ

(第二) 既ニ義膜ヲ構成シ全部ニ蔓延シタル片ハ毛筆ヲ以テ鼻道或ハ口腔ヨリ日夜毎半時義膜上ニ塗布スヘシ  
(第三) 注意スレハ指ヲ以テ義膜ノ一片ヲ剝離シ得ヘキ重症ニアリテハ同シク毛筆ヲ以テ一乃至二分時ノ休憩時ヲ以テ全一分時持續シテ施スヘシ又同場合ニ於テ尙三千倍ノ昇汞水ヲ混シテ用ユルモ可ナリ

(第四) 劇甚ナルモノニ向テ混合劑ノ内用ハ其功著ルシカラス

沒藥丁幾ヲ塗布スル片ハ其効力半時間持續スルハ學理上明瞭ナレバ之レヲ過クレハ其効力ヲ失フカ故ニ每半時反復塗布スヘキハ勿論ナリ

之ノ報告シタル疾病ノ歴史上ヨリスルモ又同氏ノ十三年間ノ經驗上ヨリスルモ同氏ジフテリ―療法ニ他法ノ遠ク及ハサルヤ言ク俟タス殊ニ多クノ經驗ニユルモ殆

ント全ク治リ且數日ヲ要セサレハナリ

## ◎ 脊椎炎ニ就テ (Centralb. f. Ching. No. 21. 1899)

B. Barlow : 脊椎炎ノ初期ニ於テ鉛直軸ニ沿テ脊椎ノ廻轉スルハ本症診斷ニ必要ナル症狀タルヲ信セリ然レニ世間外科醫ノ之レニ注目スルコト少クシテ只慢性炎性ノ脊椎病ニ於テノミ早ク注目シ且甚シキ脊部彎曲ニ向テ以前行ハレタル療法ニ由テ之カ増進ヲ防キ得ヘキ否ヤノ問題起ルニ至リテ殊ニ必要ナルコトヲ說ケリ同氏ノ經驗ニ由レハ本症第一期ニ於テ既ニ脊椎骨及腰部ノ犯サルコトハ常ニ脊椎ノ病的廻轉ヲ有シ尙疾病ノ進行ト其位置ヲ參考シテ併セテ刺戟症狀即局部ノ疼痛及脊筋ノ緊張ニヨリテ偏彎廻轉ト區別シ得ヘシ若シ脊椎炎ナルコトヲ最初期ニ於テ知リ之レニ適當ナル療法ヲ施シ安靜ヲ命シ適合シタルコルセツトチ與フル片ハ其成績ヲ得テ脊柱ノ鉛直ト荷擔力ノ恢復スル敢テ難キニアラサ

ルヘシト云ヒリ

(當地地方ニ於テハ殊ニ本症ノ多キヲ見ル故ニ多少ノ裨益アラシカト信シ爰ニ掲ク)

# ◎腸室扶斯梅毒ノ胎兒ニ移行スルニ

就テ (Fortschritte d. Medizin Bd. VII p. 889-899)

母体腸室扶斯梅毒ノ胎兒体内ニ移行スルハ世間既ニ人ノ唱ル處ナレハ Hildebrand ハ更ニ新經驗ヲ加ヘタリ即チ氏ハ線密ナル經驗方法ト胎兒体内ニ發見シタル梅毒有様ニ由リテ疑團稍々氷解セリ而シテ氏ハ腸室扶斯患者ノ胎兒ノミナラス胎兒内諸器臟ヨリ得タル梅毒ノ大小形狀其生活運動種々ノ染色法ノ關係及種々ノ培養法ノ關係ヲ明瞭ナル記號ヲ以テ定メタリ然レハ其胎兒体内傳染ノ種類及時期ニ至リテハ未ダ詳ニ之レヲ知ルコト能ハスト

千八百八十五年乃至千八百八十七年内 (Fortschritte der

Medicin VII p. 161-168) Reher, Neubaus, Chantemesse, W

idal 諸氏ノ報告ニヨリテ室扶斯萌芽ノ母体ヨリ胎兒体内ニ移行スルハ疑フヘカヲサル事實トシ C. J. Eber 氏講究后尙確實ナルヲ証明セリ即チ同氏ハ同患者ノ尙卵膜ヨリ被ハル、胎兒ノ新鮮ナルモノヲ探究ノ材料トシ其心臓血液肺及脾臟液ヨリ標本ヲ造リ其内ニ室扶斯梅毒アルヲ發見セリ又時々胎盤絨毛空隙内腔ノ血液内ニ血球ニ混シテ梅毒ノ存在スルヲ見タリ然レハ之ノ梅毒ニ相類似スル腐敗有機体ノ存在スルハ同氏ノ他ノ流産ニ就テノ實驗ト Gaffky 氏ノ說ニヨリテモ知ルヘシ是ニ由リテ之レヲ見レハ梅毒ノ胎盤ノ循環障害殊ニ血液ノ爲ニ胎兒体内ニ進入スルハ殆ント信スヘシト雖モ之ノ有様ノ同病患者ニ常ニ見ルヘキカ又アル一定ノ場合ニミ移行スヘキモノナルニ至リテハ証明スルコト能ハスト

(抄 錄) 簡便ナル竹製吸入器 疥癬ニ於ケル石炭酸ノ奇効

三百六十四

(以上四項) 坂野長三郎抄錄

◎簡便ナル竹製吸入器(東京醫學會雜誌抄錄)

ドクトル、ベルツ氏ハ近頃一ノ竹製吸入器ヲ創製シ之ヲ我第一醫院ノ入院患者ニ試用セシニ頗ル好結果ヲ得タリトテ之ヲ東京醫學會ニ報告セラレ笠原醫學士之ヲ代演セリ其器ハ長サ四寸許ノ筆鞘ノ如キ竹管ニシテ其兩端ハ「コルク」ヲ以テ栓シ其中ニハ藥液ヲ綿絮ニ浸セシ者ヲ入レ用ニ臨ンテ兩端ノ栓ヲ取去リ口ニ含ミテ深呼吸ヲ爲サシメ鼻ヨリ呼出セシムルヲ一日數回十五分乃至二三十分宛行ハシム此器ハ極メテ廉價ヲ以テ買求ムルヲ得ヘク且ツ肺癆患者等ノ外出等ニ際シ辛カニ咳嗽發作ニ腦ムト直ニ之ヲ用テ鎮咳ノ効ヲ奏スルヲ得可シ其ノ藥液及ヒ適應症ハ左ノ如シ

(處方) 帝列並油二〇、〇 薄荷油二、〇

「クレチノード」二、〇 依的兒二、〇

「カンフル」二、〇 以上呼吸器病ニシテ

分泌亢進シ咳嗽少キ時及ヒ鼻加答兒初期

ニ吸入セシメテ効アリ

(處方) 帝列並油二〇、〇 「カンフル」二、〇

「エーテル」二、〇 以上咳嗽發作時ニ用ユ

◎疥癬ニ於ケル石炭酸ノ奇効

(大坂興醫學社月報)

ドクトル、シリアン氏ハ石炭酸一分ト阿列布油十五分トヲ混合シタル者ヲ大人及ヒ小兒ノ疥癬ニ塗布シテ其効アリトシ同氏ハ尋常硫黃療法ヲ施スモ効ナキ者ニ本劑ヲ用ヒ數日ニシテ全治ヲ收メタルヲ屢之アリト云フ

(以上二項) 抄錄

◎丹毒及賣布の里性咽頭炎ニ昇汞ノ

# 亞爾箇保兒性水溶液ヲ用フ (W. med. W.

oehensch. No. 22. 1890.)

フイアカリニ—Dr. J. Fiaccarini 氏ハ脫脂用トノ數人ノ重症丹毒ニ四十%ノ亞爾箇保兒ヲ患部ニ點滴セシニ其部蒼白トナリ且硬結及疼痛著シク減少スルヲ發見セリ之レニ效フテ氏ハ亞爾箇保兒ト強昇汞水(〇、五乃至一瓦ノ昇汞ト亞爾箇保兒水各五十瓦)ノ混合液ヲ以テ患部ヲ洗條スルヲ企タリ此療法ハ一日三乃至六回反復シ且ツ稀薄ナル昇汞水(昇汞〇、五、鹽水五〇〇、〇アルコール一〇〇、〇)ヲ濕シタル布片ヲ以テ患部ヲ被ヒ其他体力ヲ保存スル爲メニ種々ノ強壯劑ヲ用フルニアリ、又咽頭實布の里性炎ニハ「アルコール性昇汞水(〇、四乃至〇、五ノ昇汞ト「アルコール水各五、〇)ヲ一日三回患部ニ塗布シ暫時ノ後含嗽シ且毎二時二%ノ鹽剝水ヲ以テ含嗽ス若シ齒齦或ハ口唇ノ炎症ヲ來スルハ之

レニ代フルニ石炭酸水(石炭酸二、〇乃至二、五、鹽水八〇、〇アルコール二〇、〇)ヲ以テシ鹽剝ノ含嗽ヲ持續ス

## ○密尿病ノ原因ニ就テ (Centralb. f. die Wisse

nseh. No. 20. 1890)

健康ナル二十歳ノ一男子証明スヘキ原因ナクシテ密尿病ヲ來シ衰弱ヲ以テ入院セシカ間モナク退院シ二三日ノ後虛脱ニ陥リ遂ニ昏睡ヲ以テ死セリ之レヲ剖檢スルニ第四腦腔ニ細小ナル葡萄狀ノ囊腫アリ且ツ被膜ニモ「ボリープ」ヲ生シ爲メニ室擴大セリトミツヘル Michael 氏ハ「リテラツール」上此部ニ囊腫ヲ生シテ單尿管ヲ發セシハ只一回ノミ發見セリト、其他ボルリッゲル Bollige 氏モ之レト同一ノ發現ヲ呈セル者ヲ報告セリ

## ○翼皮ヲ有スル先天性胸筋ノ欠亡ニ就

テ (Centralb. f. d. med. Wissensch. No. 20. 1890.)

(抄録) 丹毒及實布の里性咽頭炎ニ昇汞ノ亞爾箇保兒性水溶液ヲ用フ 密尿病ノ原因ニ就テ 三百六十五



(抄 錄) 翼皮ヲ有スル先天性胸筋ノ欠亡ニ就テ 日本ニ於ケル擴節裂頭條虫ノ源

三百六十六

ブルンスL. Brunns氏及クレーデルL. Krole氏ハ健康ナル兩親ヨリ生レタル十二才ノ小兒ニシテ先天性ニ大胸筋、小胸筋、及左側ノ前大鋸筋欠亡シ胸ト左上膊トノ間ニ之レヲ連繫ス。翼皮アリ其兩皮板間ハ捷ヨリナル者ヲ見タリト且ツ左側ノ示指ト中指ノ第一節間ニモ蹠膜アリ第四指ト第五指ハ屈曲シテ自ラ展伸ス。能ハス左上膊ハ其發育不完全ニシテ背椎ニハ左彎曲アリシト然レモ働作障害ハ少ナクノ現ニ體操ノ如キハ級中ノ優等者ニシテ水練ニモ上達セリト云フ

### ◎ 日本ニ於ケル擴節裂頭條虫ノ源

(國政醫學會雜誌)

ドクトル 飯島魁氏曰鱧ハ擴節裂頭條虫ノ生源ナリト、道氏ハ該魚七尾ニ就テ之レヲ檢セシニ皆五六條ノ幼虫(長卅密迷幅一乃至三密迷)ヲ有セリ(中一尾ハ北海道ヨリ輸送セシ者ニシテ腐敗セルヲ以テ充分檢索スル能ハ

ス)之レヲ確證センカ爲メニ自ラ二箇ノ幼虫ヲ嚥下セリ(中一箇ハ損傷セリ)然ルニ第三日ニ至リ初メテ十二指腸部ニ微痛ヲ訴ヘ第十八日目ニ下痢シ第二十一日目ニ二十二、五仙迷ノ條虫ヲ排泄セリ依テ其翌日驅虫劑ヲ服セシコ果シテ同虫ヲ排出セリ其全長徑三百十五仙迷(一丈餘)片節ノ數千四百六十七箇其中後部ノ六百十七箇ハ己ニ子宮中卵ヲ含有セリト之レヲ以テ見レハ彼微細ナル幼虫カ僅々十二日間ニシテ右ノ大ニ達シタルヲレハ成長ノ速ナルヲ驚クヘキナリ(但シ一箇ハ發育セカリシナラン)又此間ニハ屢々大便ヲ鏡檢セシト雖モ一箇ノ卵ヲモ發見セカリシト然レハ其卵ヲ排出スル迄ニハ尙數日ヲ要スヘキヤ論ヲ俟タサルナリ之レト一致シテブラウソ Braun氏カ猫及人ニ就テ檢セシニ幼虫ヲ嚥下セシヨリ一ケ月目ニ卵ヲ發見シ條虫ノ長サハ三百三十五仙迷ニ達セリト又Nishikie氏モ數人ニ試驗ヲ施シ

同様ノ結果ヲ得タリ其四ノ場合ニ於テ症候ハ幼虫燕下  
後十六乃至二十二日ニシテ現ハレ二十乃至二十六日ニ  
シテ驅除シ得タル數繭虫ハ平均百二十九仙迷ニ達セリ  
ト云ヘリ、維科中鮭、やまべ、其他鮭、鯉、鮎、ヲ檢セシト  
雖モ一箇ノ幼虫ヲモ發見シ能ハサリシト

◎石鹼ニ就テ (Schmidt's Jahrbuch No. 4. 1880)

善良ナル石鹼ハ表皮ヲ害セスノ皮脂ト混シタル汚物ヲ  
乳化スルモノナリ故ニ石鹼ハ中性ナルヲ要ス、其反應  
ヲ檢スルニ善良ナルハ昇汞水ナリ即チ乾燥シタル石鹼  
面ニ之レヲ點滴シ若シ黃色ヲ呈スルハ遊離亞爾加里  
ノ存スル証ナリ

石鹼ニハ膺造物アリテ樹脂、水硝子、澱粉、膠、粘土、白  
堊、馬鈴薯粉、舍利別、砂糖及他ノ狹雜物ヲ混スルコト  
アリ

石鹼ハ皮膚ノ藥ニ向テ善良ナル應用藥ナリ殊ニウシナ

氏ノ經檢ニ由テ製シタル七、四%ノナレフ油ヲ加ヘ  
タル者ヲ以テ良トス之レ四%ノ鹼化セサル油分ヲ含  
有スレハナリ

石鹼ハ其基礎物ニ由テ三種ニ區別ス曰亞爾加里石鹼曰  
中性石鹼曰酸性石鹼(過剩ノ脂酸或ハ他ノ酸性反應ヲ  
呈スル者ヲ附加セシニ由ル)之レナリ

石鹼ノ使用法ハ(一)單一洗滌(二)泡沫ヲ乾磨ス(三)石  
鹼泡沫ヲ乾燥セシム(被布ナシニ)(四)之レヲ緻密ナル  
被覆ヲ以テ被フ

アイヒホッフ Eichhoff 氏ノ試用シタル者ハ「アイムスプエ  
テル」ノ「ドグラス氏ノ製シタル者ニシテ「ハムブルヒ」ノ  
藥劑師 Meich 氏ノ検査セル藥用石鹼ナリ而シテ左ノ礎質  
ヨリナル

最良牛脂	五九、三%	ナレフ油	七、四%
ナトロン鹼汁	二二、二%	加里鹼汁	一一、一%

(第一) 過脂レゾルチン、ザルチール石鹼 *Ueberfettete Resorcinolseife* ハ基礎石鹼九四、レゾルチン三、水楊酸三、ヨリナル之レ寄生性過脂性濕疹其他乾癬、粉刺、魚鱗疹ニ用ユ、但シ輕度ノ濕疹ニアリテハ單ニ此石鹼ニテ洗滌スルヲ以テ足レリトス然レヒ重症ナルカ或ハ他ノ皮膚病ニハ嚴整ナル用法ヲ行フ

(第二) 過脂ザルチル、レゾルチン硫黃石鹼 *Ueberfettete Salicylresorcinolschwefelseife* ハ石鹼八十四水楊酸三、レゾルチン三沈降硫黃十、ヨリナルE氏ハ主トノ尋常及蕁麻疹粉刺并ニ皮膚ノ深キ浸潤チ有スル過脂性濕疹ニ用エ殊効アリト云ヘリ

(第三) 過脂ザルチル、レゾルチン、硫黃麥兒石鹼 *Ueberfettete Salicylresorcinolschwefeltheerseife* ハ石鹼七九、水楊酸三、レゾルチン三、硫黃十、水性麥兒五、ヨリナリ鱗狀濕疹、尋常乾癬ニ用フ

(第四) 過脂規尼涅石鹼 *Ueberfettete Chininseife* ハ石鹼九十七、硫酸規尼涅三、ヨリナリ糠秕疹ニ連用ス

(第五) 過脂ヒドロチキシルアミン石鹼 *Ueberfettete Hydroxylaminseife* ハ石鹼九七鹽酸ヒドロチキシルアミン三、ヨリナリ乾癬及濕疹ニ稱用ス

(第六) 過脂沃度ホルム石鹼 *Ueberfettete Jodoformseife* ハ五%ノ者ニシテ下脚ノ潰瘍ニ用フ

(第七) 過脂クレタリン石鹼 *Ueberfettete Kreolinseife* ハ疥癬ニ殊効アリ其他傳染性膿胞、紅爛、足蹠過汗ニ用フ

(第八) 過脂エルゴチン石鹼 *Ueberfettete Ergoinseife* ノ五%ノ者ハ單一ナル皮膚ノ動脈性充血例之蕁麻疹粉刺、脈管性濕疹、脈管擴張チ有スル癰痕ニ用フ

(第九) 過脂沃度石鹼 *Ueberfettete Jodseife* ハ石鹼九五、純沃度三、沃度加里一、五ヨリナリ瘰癧及腺腫瘍、慢性腫起(例之皮炎)ニ用フ

其他沃度石鹼ハ梅毒性疹及其潰瘍、狼瘡、乾癬、過脂性濕疹、糠秕疹、寄生性シヨシス白禿瘡ヲ用フ

(第十)過脂サルチール、クレタット石鹼 Ueberfettete Salicylkreosotsäure ハ石鹼九三、水楊酸五、純クレタットニヨリナル狼瘡、乾癬、過脂性濕疹、寄生性シヨシス、禿瘡ニ用フ

(以上五項) 飯森益太郎抄録

### ◎脾摘出ニ於ケル密尿病ニ就テ (Centralb

l. f. Physiol. Bd. IV. No. 4. 1880)

Arthaud及Butte氏ハ近來Minkowski氏ノ發見セル全脾摘出ニ由テ來ル密尿病ノ事實ナルヲ証明セリ而シテ之レニハ左ノ想像說アリ

(1)生活中ニハ血中ニ一ノ醱酵素アリ不斷脾ヨリ分泌セラル、者ナリ然ルニ此腺ヲ摘出スルトハ血中ニ鬱積シ

次テ肝グリコーゲン」ニ集積變化ヲ及ボシ密尿ヲ發スト然レモ此說ハ次ノ試験ニ由テ根據ヲ失ヘリ何トナレハ植物醱酵素或ハ脾素ヲ血中ニ注入スルモ密尿ヲ來サレハナリ

(2) Lepine氏曰脾ハ崩糖質ヲ製スル處ナリ故ニ此腺ノ摘出スルハ糖分解セスノ器臟中ニ蓄積シ遂ニ尿中ニ來ルト

A氏ハ此二說ヲ檢センカ爲メニ犬ノ脾靜脈ヲ結紮シ崩糖質ヲ脾ヨリ輸出セシメサリシ然ルニ尿中ニハ少シノ糖ヲモ發見セサルノミナラス(反テ「ペプトン」及アルブミンヲ含有セリ)動物ハ手術ノ第三日ニ死亡セリ

(3)以上ノ試験ニ由テA氏等ハ肝血管ノ擴張スルヲ發見セリ(脾循環攔絶ノ爲メ)此擴張ハ密尿ノ原因ナリ 譯者曰肝中血液多量ニ通又試ミ、犬ノ脾動脈及右帽胃動脈ヲ過スルヲ以テ

(脾十二指腸動脈分岐前ニ於テ)結紮セシニ初メハ毫モ

(抄録) 小囊腫ニ格魯兒亞鉛ノ注入「フレグモ子性咽頭炎ノ療法

三百七十

成分上ニ變化ナ認メカリシト雖モ三ヶ月ノ後死セル

前日ヨリ尿中ニ糖ヲ混シタリト

### ◎小囊腫ニ格魯兒亞鉛ノ注入 (Centralbl. f.

d. med. wissensch. No. 8.1890)

A. Launerer氏ハ〇、一%ノ格魯兒亞鉛液五分ノ一乃至一、五立方仙迷ヲ五箇ノ「カンタリエン」、粘液囊水腫ノ三「ファール」、多數ノ副粘液囊、一ノ陰囊水腫(六週ノ小兒)及一ノ蝦蟇腫ニ注入シテ効ヲ治メタリ

### ◎「フレグモ子性咽頭炎」ノ療法

Helbing氏ハ此症ニ患部ニ對セル頸ニ三乃至四箇ノ「クロトン油」ノ塗擦ヲ實用セリ然ルモハ疼痛嚥下困難ハ暫時ノ後ニ、腫起ハ多分翌日ニ至レハ消散ス然レモ只不良ナルハ濕疹ヲ生スルニアリ

(以上三項)

界外仙史抄録

## 本會記事

### ◎第十五回常集會

ハ去月十九日午後一時ヨリ第四高等中學校醫學部第三教場ニ於テ開會セリ當日ハ火雲焰々トシテ長空燒カ如ク流汗津々衣ヲ搾ルカ如キ炎熱ナルニモ係ラス會員ハ續々來集シ總數二十六名ヲ算フ、席定ルヤ左ノ演說アリ全ク閉會ヲ告シハ午後六時頃ナリキ

### ●第一席 飯森益太郎(腎臟結石ニ就テ)

氏ハ先ツ腎結石ノ發生、種類、名稱、及結石ニ由テ來ル疾病ヲ列舉シ次テ腎石患者倉谷某、木戸口某ノ既往症、現症、剖檢記事ヲ略述シ終リニ數箇ノ大結石及之レカ爲メニ起レル腎囊腫ノ亞爾簡保兒漬標品、及其「アレパレート」ヲ顯微鏡下ニ照シ會員ニ示セリ

### ●第二席 山田謙治(婦人ノ疾病ニ就テ)

婦人ノ諸疾患(婦人科的疾病ニ非ラス)ハ男子ト同一ナ  
 リト雖モ獨リ月經時ノ前後ニ於テハ多少異常ノ經過ヲ  
 取ル者ナリ殊ニ肺結核、萎黃病、血友病、心辨膜疾患、新  
 陳代謝ノ如キハ其影響ヲ及スコ大ナリト、氏ハ上記ノ  
 諸病ニ就テ月經時ニ於ケル交互ノ關係、及其特異ナル  
 症候等ヲ述ヘ尙ホ論シ盡サ、ル處ハ次回ニ述フル旨ヲ  
 告ケ演壇ヲ降レリ、

### ●第三席

田中正鐸

(醫藥分業ハ目今ノ急務ニ  
 非ラス)

氏ハ現今社會ノ一問題タル醫藥分業ノ事ニ就テ種々ノ  
 例證ヲ掲ケ分業ノ尙早ナルヲ述ヘ大ニ丹波敬三氏ノ  
 分業論ヲ駁シ後半ハ來九月ノ常集會ニ述フル旨ヲ納シ  
 下壇セリ、本題ニ就テハ來會者中二三ノ反對論者モア  
 リ内ニハ之レヲ討論題トナシ會員ノ輿論ニ訴フヘシト  
 云ヒ或ハ之レヲ不可ナリ云フモノアリ忽チ議論百出シ

會場ハ宛トシテ鼎ノ沸シカ如クナリシモ次ノ辨士演壇  
 ニ昇ルト同時ニ漸々鎮靜セリ

### ●第四席

岡田剛吉

(卵巢囊腫手術實見談)

去月六日山田謙治氏カ二人ノ卵巢囊腫ヲ手術セシ際氏  
 ハ其介者タリシヲ以テ手術ノ順備、消毒、器械、手術式、  
 術後ノ處置等實際上緊要ナル點ニ就テ懇ロニ述ヘ且ツ  
 同患者篠田某、濱部某ノ既往(現在及術後ノ經過ヲ説キ  
 終リニ摘出シタル卵巢囊腫二箇ヲ會員ニ示サレタリ  
 其他瀬尾順四郎氏ノ「脱肛ニ就テ」ト云フ演説アリシ筈  
 ナリシカ氏ハ何ナ事故アリシト見ユ中頃退場サレシヲ  
 以テ之レニテ閉會セリ

### ◎會員動靜

●會員高安右人氏 は公用にて上京中の處去月十九日  
 歸校せられたり

●會員有松戒三氏 は去月十七日上京を命せられ翌日出發せらる其滞在日數は凡そ二週間斗ありと云ふ

●會員池龜祐藏氏 は去月十七日第四高等中學校醫學部助手外科勤務を命せられ兼て同三十日石川縣金澤病院醫員を囑托せられたり

●會員竹内拙藏氏 は令母病氣の爲め去月十日俄かに郷里福井へ歸省せらる又同氏は此程願に依りて當醫學部助手の職を解かれたり聞く處に據れば氏は來る九月頃上京し専ら獨逸學を研究するの目的ありと云ふ

●會員松山五七郎氏 は預て醫學研究の爲め上坂中の處去月上旬歸澤せられたり

●會員岸千尋氏 は暑中休暇を以て郷里岡山へ郷省中の處月九日歸校せらる

### ◎新入會員

前回報告後入會セラルル諸君ハ左ノ如シ

第四高等中學校醫學部生徒 窪田 房吉君

愛知縣名古屋市南堀川町 小原芳雄君

### ◎寄贈書目

北越醫學會會報 第二十八號 同 會

熊本醫學會雜誌 第四十六號 同 會

京都醫學會雜誌 第三十號 同 會

裁判醫學會雜誌 自第廿七號至第廿九號 同 會

國政醫學會雜誌 第三十九號 同 會

私立曉進醫學會雜誌 第二年三號 同 會

輓近外科學會報告 第十七號 同 會

北海道醫事講談會月報 第十六號 同 會

諸方病院醫事研究會申報 第二十五號 同 會

藥學月報 第十二號 同 會

實地醫報

第三號 同 社

大坂興醫學社月報

第十八號 同 社

## 雜 報

## ●第二回醫學部卒業証書授與式 は豫記の

如く去月十五日午後四時より本校雨天体操場に於て施行せられたり今其概況を舉ぐれば門前には闐々たる綠門を造り上に國旗を交叉し門内には數千の球燈を前後左右に釣し正面に尙數百箇の紅燈を以て「高」の字を模れり、玄關に至れば接待掛あり一々之れを休憩室に導き茶菓を饗する等用意極めて周到あり殊に當日は暑氣甚たしきを以て「ポンプ」にて屋上に水を注ぎ炎天に時からぬ雨を降らしめ室内には所々に氷山を築き盛夏に雪を踏ましむるか如きは時に取りての馳走と云ふへし聽て第一撃拆を報するや職員生徒式場に臨み第二撃拆

にして來賓着席す坐定まるや柏田校長は卒業證書を授與し終りて一場の演説をおし卒業生總代の答詞あり引續き飯盛數頭、木村部長の演説あり終て來賓に酒肴の饗應あり全く散會せしは午後六時頃ありき同日の賓客には三好大佐、木村、久芳、富永、岡本、各少佐衛戍將校、郷田徳久兩書記官、野間口警部長、近重裁判所長、其他都長、縣會議員、學校長、卒業者父兄親戚等百數十名あり校長の演説卒業生總代の答詞は左の如し

卒業生諸氏、諸氏ハ今回本校ノ課程ヲ了リ將ニ本校ヲ辭スルニ當リ余ハ職務上一言ノ臆ヲナシテ別ヲ告クルハ亦々必要ノ事ト思フ、抑モ高等中學ノ目的ハ更ニ高等ノ學校ヘ進入セントシ成ハ實業ニ就カントスル者ヲ養成スル所トハ明文ノ示ス所ナリ併シ猶一層國家ニ對シ重要ノ關係ヲ有センコトヲ忘却スヘカラス重要ノ關係トハ何ソヤ國民的ノ精神ヲ養成スル終局ノ場所タル是ナリ國民精神養成ノ事ハ國家ニ於テ早ク小學ヨリ始メ敢テ高等中學ニ於テ始ムルニ非ラス國民精神ノ發揮ハ大學其他高等專門校及實業界ニ於テス敢テ高等中學ニ於テ終ルニアラス併シナカ



此精神ヲ十分ニ養成シ鍛鍊シ辛苦ニ遇フ毎ニ却  
 益發揮スルノ基礎ヲ確立スルハ高等中學ヲ以テ終局  
 ノ場所トナサ、カヲ得ス何トナレハ是レヨリ前ハ未  
 タ十分ニ養成ヲ完全ニスルノ歲月ト年令トヲ得ス是  
 ヨリ後ハ専門ノ學術技藝及實業ニ思テ潛メ心ヲ苦メ  
 殆ント其他ヲ顧ルニ遑アラサレハナリ諸是ヨリ進テ  
 此精神カ當今ニアリテ言換レハ他ノ富強ニシテ文物  
 ノ進歩シタル國ト一旦交通ヲ始メ一國ヲ舉ゲテ知ラ  
 ス識ラス其制度文物ヤ學術宗教等ヨリ習俗好尚等ニ  
 至ルマテ善惡ヲ甄別セスシテ健康模範スルノ時ニ當  
 テハ最必要ナル所以ヲ説カン凡ソ世ノ中ニ負債程恐  
 シキ物ハアラス其辨償ヲ了ヘサルニ當テハ遂ニ身代  
 限リヲナシ公權モ褫奪サレ固有ノ財産ハ悉ク擧テ債  
 鬼ノ有トナサ、ルヲ得ス併シ又負債程有要ノ者ハア  
 ラシ世間ニテ一代ニテ富豪トナリタルモノハ大概始  
 タハ無一物ノ貧生ニシテ負債ノ御蔭ナリ之レヲ用エ  
 テ不測ノ害トナリ之レヲ用エテ無上ノ益トナルハ何  
 シヤ之レヲ用フル人ノ如何ニアルノミ國ト國トノ關  
 係ニ至ツテモ亦如此故ニ外資輸入ノ利害得失ニ至テ  
 ハ世論囂々未タ其歸着スル所ヲ知ラス自由貿易家ハ  
 其必要ヲ説キ苟モ貧弱ノ國ニ一旦富強ノ國ト拮抗  
 セント欲セハ先ツ諸般ノ事業ヲ起サ、カヲ得ス今貧  
 國ニ其募本ヲ自國ニ貸ルハ甚タ難シ若シ無理ニ内  
 國ノ流動資本ヲ集メテ之レヲ固定シ目前ノ用ヲ奪フ

ニ至テハ社會万般ノ事業靡乾渴シ全ク運轉ヲ止ムル  
 ニ至ル故ニ外國ニ餘リテ低利ナル所ノ資本ヲ用ルハ  
 必用ノ事トナス之レニ反テ保護家ハ駁シテ曰ン自由  
 家ノ理論一應尤モナレト所謂千金ノ子ニ非ラサレハ  
 千金ヲ用ル能ハス運用ノ法ニ慣レサル者ハ忽チ大金  
 ヲ掌握セシムルニ至テハ不製産的ニ消費スルコト多  
 ク事業ハ失敗ニ失敗ヲ重テ之レヲ繼續セントセハ愈  
 資本ヲ要シ遂ニ辨償シ能ハサルニ至リ其結果ヤ今迄  
 ノ質朴ノ風ハ忽チ變シテ奢侈トナリ勤勉ノ俗ハ直ニ  
 化シテ放逸トナリ經濟世界ハ物價ノ激變ニ因テ大ニ  
 攪乱サレ同胞相傷ケ親戚睚眦スルニ至リ而シテ全國ヲ  
 舉ケテ債主ノ有トナサ、ルヲ得サル境遇ニ陷ル外資  
 輸入ハ一國ノ獨立ヲ維持スルニ於テ最可忌ノ事ナリ  
 ト如此相反スト雖用之レヲ用エテ富強トナリ之レヲ  
 用エテ亡國ノ端ヲ開クトハ國民精神如何ニアルノミ  
 國民タル者低廉ノ資金ヲ利用シ早ク本金ヲ返シ之レ  
 ヨリ得タル利潤ヲ我者トナスノ精神旺盛ナルニ至レ  
 ハ豈何ノ恐れ、コトカ之アラン世論已ニ外資輸入ニ  
 付テハ其利害得失ヲ云フヤ喋々タリ併シ之レヨリ一  
 層大切ナル制度文物ヨリ學術宗教知識ヲ輸入スルニ  
 付テハ其利害ヲ感シ得失ヲ慮ルノ深キ者夫レ將幾干  
 アル乎外國ノ文物知識ヲ輸入シテ或ハ起リ或ハ倒ル  
 ハ外資輸入ニ於テヨリモ猶ホ烈シキモノアリ然ラ  
 ハ如何セハ可ナラン毫モ資本輸入ト異ナルナシ彼ノ

優勝ナル文物知識ヲ採用シ長ク之レヲ師トシテ尊ハス之レヨリ一種ノ新機軸ヲ出シ早ク其本金ヲ返シテ負債主タルノ境界ヲ脱スルニアルノミ我國モ從來東洋ノ一階ニ閉局シ世ノ大局ヲ知ラス清貧以テ自ラ足レリトシタルモ一朝風雲ノ變ニ過ヒ交通ヲ開クニ當テハ勢優勝ナル所ノ彼ノ文物智識ヲ輸入セサルチ得ス否勤メテ之レヲ輸入シ我ノ不足ヲ補ヒ以テ文明ノ進歩ヲ翼クルハ必要ノコトナレリ此ノ革運ノ時ニ當テ尤モ國家ニ必要ナルモノハ國民的ノ精神ヨリ他ニアラス若シ此精神旺盛ナラサレハ假令政体制度ハ議院ヨリ町村ニ至ルマテ整然トシテ觀ルヘク陸海軍ハ軍團ヨリ艦隊ニ至ル迄燦然トシ榮フヘク學問教育ハ大學ヨリ小學ニ至ル迄秩然トシテ賞スヘクモ悉ク之レ傀儡ノミ何ソ以テ尊フニ足ラン唯尊フ所ハ一日モ早ク負債主ノ境界ヲ脱シ純然タル獨立ノ靈地ヲ創ムルニアルノミ之レヲ成スト否トハ國民的精神ノ旺盛如何ニ存ス諸氏ノ中大學ニ入ルモノハ益外國日進ノ知識ヲ習用シ他日ノ大成ヲ望マサルチ得ス而シテ國民タル精神ノ養成ハ本校ヲ以テ終局ノ場所トセハ各自奮テ己ニ養成シタル精神ヲ發揮シ擴張シ日本國ヲシテ益文明ノ域ニ進メルト同時ニ早ク負債主ノ境界ヲ服セシメントスル遠大ノ志、高尚ノ操ハ決シテ忘却スヘカラス今別ニ臨ミ平生ノ懷ヲ述ヘテ臚トス諸氏乞フ之レヲ服膺セヨ

## 答 詞

第四高等中學校長閣下茲卜本日請各官廳高等官招在野紳士爲仁七郎等卒業生舉行證書授與之盛典特賜懇篤之訓嗚呼仁七郎等之光榮何加焉回顧仁七郎等學於本校已數年矣苟非得閣下用意之周匝與教官薰陶之篤摯則何得期今日之榮哉夫醫學之用大且深矣方今開明昨日之爲奇爲怪者今日皆以爲當然而至癘症之原因等猶未明其理者多矣豈今日之勢而止焉哉仁七郎等爾後謹服膺閣下之訓臨實地推原理孜孜黽勉欲以期大成干將來也聊呈蕪言以代答辭

第四高等中學校醫學部第二回卒業生總代  
明治廿三年七月十五日 篠尾仁七郎

## ●卒業生祝宴會

は前號の紙上に記せし如く去月十七日午後四時より野田寺町古今亭に於て開會せり今其景況を掲ぐれば入口には新形の緣門を設け其右側に「第二回高等中學校醫學部卒業生祝宴會」と大書し樓上樓下には隙間もかく數千の球燈を吊し盛況を添へたり當日の來會者は卒業生、校長及醫學部職員生徒等無慮七十餘有名、坐定るや坂野長三郎氏は起ちて開會の

主意を述へ引續き藤井秀、田中正鐸、笹川宗治、正見伊三郎、伊藤脩郎、篠尾仁七郎、生駒廣太郎、佐川忠茂等諸氏の演説あり或は多年螢雪の勞を積みて卒業せるを祝するあり或は將來に向て希望を述ふるあり殊に田中氏か自作の軍歌を讀みし時は一層の壯快を覺へたり、酒間互に胸襟を開きて既往の辛苦を慰め或は後來の方針を談し時移るに従ひ或は歌ふあり、吟するあり、各充分の歡を盡し全く散會せしは午后十一時頃ありき因に記す本會の發起者として盡力せし人々は山崎秋津麿、竹本和太郎、坂野長三郎、永山一昌の諸氏ありと、

### ●死体解剖

石川郡柏野村五拾二番地北キク(安

政二年五月生)は子宮癌腫に罹り救療入院中の處去月六日死亡せしに付き同八日午前七時より醫學部に於て解剖せられたり又本市彦三六番丁四拾六番地直江イッ(天保三年七月生)も同しく子宮癌腫にて去月三十一日

死亡せしに付き本月一日解剖せられたり

### ●堤從清氏

金澤病院藥局長堤從清氏は過般東京

に於て開設せる藥局長會議の爲め上京中の處去月十六日歸校せられたり

### ●藥局長會

預て丹羽藤吉郎、丹波敬三、長與專齋、

長井長義、山田董、三宅秀、島田耕一、下山順一郎の八氏發起者となり藥局改良の目的を以て藥局長會を開かんとて各府縣公私立病院藥局長並に藥劑主任者を招集せられしか會者凡そ百三十余名にて去月十三日より十五日に至る三日間帝國醫科大學藥學教室に於て會議を開き各條項を決定せりと云ふ右會議の要件を舉ぐれば左の如し

一公私立病院ノ藥品調合所ハ藥劑局ト稱スヘシ藥劑局ニハ專任藥劑師ヲ置キ一般調劑製煉及ヒ劇毒藥ノ取扱ハ勿論其局ニ使用スル藥品良品ノ試験其他必要ノ衛生的試験ニ従事セシメ醫師並ニ患者ニ對シ藥劑ノ

責任ヲ負擔セシムヘシ

但シ專任藥劑師ナキ調合所ハ單ニ調劑所ト稱スヘシ  
 二各地方公私立病院ノ調劑所ハ其地方ニ於ケル一般醫師調劑所ノ模範トナリ指導トナルノ責アルノミナラス現今ノ進度ニ在リテハ地方藥劑師ノ獨立藥局ニ對比スルモ整備ノ點ニ於テ大ニ之ニ超勝スル者アルヲ以テ病院調劑所主任者ハ本會議ニ提出スル各要件ヲ始メ藥劑上ノ業務ニ付キ其地方ニ於ケル藥局及ヒ醫師調劑所ノ改良ヲ開導スヘキ者トス

一處方箋ノ件

別紙書式アリ

附毒劇藥處方箋ノ保存法及ヒ其期限ヲ定ムヘシ

一藥用重量及ヒ容量ノ件

藥劑局及ヒ調劑所ニハ「メートル」系統即チ「グラム」及ヒ「リートル」量ヲ使用シ之ニ適スル相當ノ秤器容量器ヲ具フヘシ

一調劑員ト調製スヘキ處方數トノ程準

調劑ノ繁劇ニシテ主任員ノ少數ナルキハ其操業自然疎漏ニ流レ調劑員ノ責任ニ負クヘキ錯誤ノ係ルノ恐レ多シトス故ニ調合所ニハ適當ノ人員ヲ備ヘサルヘカラス毒劇尋常藥ノ區別ヲ問ハス平均一時間一名ニテ十處方ヲ調製スルノ比例ヲ以テ調劑員ヲ置クヘシ  
 一日本藥局方製劑ノ件  
 日本藥局法ニ掲クル製劑ハ法律上必ス同方ニ適合ス

ル者ヲ使用スヘキハ勿論ナレモ同方ニ掲ケサル他國藥局方ノ類似製劑ヲ舊來慣用スル者ハ已後之ヲ廢シテ日本藥局方ノ製劑ヲ取ル機醫師ト協議スヘシ

一調劑ノ方法ニ關スル改良及ヒ注意ノ件

本項ノ各條件ハ會議席ニ於テ互ニ意見ヲ提出シ協議ヲ盡クスヘシ

附凡藥局方ニ其製法ヲ規定セル製品殊ニ之レカ瓦否ヲ鑑別スルニ困難ナル者ハ自ラ其局ニ於テ調製シ確實新鮮ナル者ヲ供用スヘシ

一調劑料徵收法ノ件

別紙意見書アリ

一藥劑局及調劑所ノ整理

醫科大學模範藥局ニ就テ實地協議スヘシ

●大學卒業證書授與式 是去月十日工科大学中

庭に於て舉行したり芳川文部大臣、辻次官、前島遞信次官、支那公使、渡邊舊總長、士官學校長、石黒軍醫總監、矢野商業學校長、木下第一高等中學校長、永井文部秘書官、鳩山和夫、杉浦重剛の諸氏を始め其他の貴紳等夥しき來賓にて午前十時着席奏樂ありて各分科大學長より卒業證書を授與し次に加藤總長の演説あり之れに對し

物理學卒業生水野敏之丞氏謝辭を述べたり其れより芳  
川文部大臣は演説主意書を朗讀して奏樂あり次に山縣  
大臣の演説あるへさ筈ありしか差支へありて出席をか  
りし右にて式を畢りしは午前十一時三十分にして來賓  
及び卒業生に酒肴を供したり今醫科及藥學科卒業生人  
名を舉ぐれば左の如し

## 醫學科

伊藤隼三(鳥取縣士族) 坪井速水(岐阜縣平民)  
岡田和一郎(愛媛縣平民) 高田耕安(京都府平民)  
若杉喜三郎(新潟縣平民) 平井敏太郎(三重縣平民)  
筒井八百珠(三重縣士族) 鶴田禎次郎(佐賀縣士族)  
谷口長雄(愛媛縣士族) 鈴木爲吉(東京府平民)  
丸茂文良(山梨縣平民) 三島通真(東京府平民)  
下平用彩(三重縣平民) 吉村源太郎(靜岡縣平民)  
關場不二彦(青森縣士族) 戸田成年(福岡縣士族)  
宮島滿治(神奈川縣平民) 落合兼亮(山口縣士族)  
海野信造(大坂府平民) 渡邊恭藏(宮城縣平民)  
舟岡英之助(福井縣士族) 北村精造(東京府士族)  
安倍朝五郎(岡山縣平民) 和辻春次(兵庫縣平民)  
高島吉三郎(石川縣平民) 林 暉 禮(愛媛縣士族)

## 藥學科

逸見文九郎(富山縣平民) 吾妻慶治(秋田縣士族)  
大村秀三郎(滋賀縣平民) 水野欽(靜岡縣平民)  
中村桃二郎(岐阜縣平民) 白江規矩三郎(長崎縣平民)  
栗本秀二郎(東京府平民) 澤邊祐尚(東京府士族)  
山本慎(三重縣平民) 近藤節藏(鳥取縣平民)  
井上槌藏(兵庫縣平民) 行德隣(福岡縣士族)  
吉永秀造(福岡縣平民) 山口虎太郎(東京府士族)  
樋口茂太郎(滋賀縣士族) 渡邊泰(新潟縣平民)  
田村貞策(宮城縣平民) 廣 瀨 胖(三重縣士族)

## 醫學器械

今回の内國勸業博覽會出品審査梗概

は述ふる所に據れば醫學器械の批評は左の如し

醫學器械モ之ヲ概論スルキハ新規發明ノ者少シト雖  
モ前會ノ出品ニ比スレハ進歩ノ見ルヘキ者アリ就中  
產科、齒科、婦人科、眼科器械、「ミクロトーム」、電氣  
器械及防腐綿絲、繃帶ノ類ハ殆ント舶來品ニ比スル  
ヲ得ヘク且ツ刀剪ノ銳利ナル者少カラス既ニ此ノ如  
キ實象アリト雖モ之ヲ今日我國醫術ノ發達年ニ月ニ  
著シキニ比スレハ寧ロ進歩ノ遲緩ナルヲ感セザルヲ

得ス必竟スルニカノ通弊トスル職工ノ學理思想ニ乏シキト製作人カ實業家ノ意見ノ參的セサルニ由レリ故ニ其大半ハ不要ノ物品ヲ製出スルニアラサレハ舊式ヲ墨守スルノ弊ヲ免レス

### ●醫師の衆議院議員 今回の衆議院議員中醫師

にして當撰したるは長谷川泰(新潟縣)濱野昇(千葉縣)

鈴木萬次郎(福島縣)豐田實頴(廣島縣)の諸氏あり

### ●撰科卒業 玉崎隆三、日下子太郎の兩氏は元石川

縣甲種醫學校を卒業し其後帝國醫科大學撰科に入りて久く眼科を研究せられしか今回卒業して歸國せらるゝやに聞及ひね

### ●全國乃格列刺患者 六月二十七日長崎縣稻佐

に於て格列刺病を發生し警封一通衛生局に達するや中濱技師、柳下屬は其檢査と豫防のため直ちに同地に出張を命ぜられ兼て内務大臣は長崎縣知事及其他の縣知事に訓令を下して豫防消毒の方法を施さしめ且つ諸開

港場には檢疫を實行して防遏遮斷を力めしも病勢猖獗暫時にして諸方に蔓延したるは當時の各新聞誌上に見し所あるか二十二日の調査に係る全國の格列刺患者總人員は初發より四千百廿五名死亡二千百九十四名にて内最多きは長崎縣千五百十四人死亡千五十六人(十日)熊本縣三百二十三人死亡一百五十三人福岡縣九百廿人死亡四百四十人山口縣三百六十三人死亡百二十一人鹿児島縣百卅人死亡百五十人(以上十日調査)等あり又發生あきは滋賀、岐阜、長野、秋田、石川、島根、宮崎、沖縄、北海道の八縣一廳ありと云ふ

### ●衛生演說會 去十三日野町光專寺に於て同會を

開き又一昨十五日香林坊福助座に於て開會せり出席辨士は寺西幸作、橋本貞衡、上杉寛二、中村順次三木榮末瀬尾順四郎、吉田茂人等諸氏あり當日の聴衆は無慮五百餘有名にして近頃稀ある盛會ありしと云ふ

# 注 意 せ よ

---

會員中本年度上半期分會  
費未納の諸君有之會計上  
指支と生ゝ甚困却致居候  
間至急御差出相成度候也

明治二十三年八月

金澤醫學會會計掛